

ユニバーサルファッション教育の実践（第2報）

—東日本大震災被災者支援のための授業実践—

長谷川 えり子、瀧 本 幸子
愛知学泉短期大学

Practical Education of Universal Fashion (Part2)

—Practical Education through Helping Disaster Affected People of Great East Japan Earthquake—

Eriko Hasegawa, Sachiko Takimoto

キーワード：ユニバーサルファッション universal fashion、
被災者支援 support for disaster affected people、
ファッション教育 education of fashion

はじめに

1990年代後半、ファッション教育の中に新しく導入されたユニバーサルデザインは、ユニバーサルファッション教育として、様々な取り組みが行われてきた。本学においても、2004年に改組転換された短大生活デザイン総合学科ファッションビジネスユニットに新カリキュラムとして導入され、8年が経過した。筆者らは新しいファッション教育の視点から捉え、すべてのひとにやさしいファッションスタイル、環境を考えたファッションスタイルを考える授業内容として試行錯誤しながら展開してきた。

第1報では、ユニバーサルファッションが出現した背景を捉え、短大のファッション教育へどのように組み入れ実践してきたかを中心に報告した。特に、身体機能が低下した高齢者や身体障害者を対象としたユニバーサルファッションについて取り上げ、ひとにやさしいファッションを考える能力を向上させる内容について述べた。¹⁾

本報では、2011年3月に発生した東日本大震災に着目し、被災者支援を目的として行ったユニバーサルファッション教育の実践について検討し

た授業内容について報告する。さらに、その取り組みについて、アンケート調査を行い、得られた教育効果、支援結果についてまとめた。

方法

1. 対象

本学生活デザイン総合学科に在籍し、2011年度後期「ユニバーサルデザイン」を履修した1,2年生（22名）とした。

2. 授業の概要

実践した教育内容の概要は表1の通りである。前半は、ユニバーサルデザインの概念を捉えるために、年齢や体型、身体能力に配慮したファッションのあり方、環境にやさしいファッションのあり方について学習した。後半では、応用内容としてユニバーサルファッションの事例研究を行った。被災者支援のためのユニバーサルデザイン活動は、後半部分の事例研究（8コマ分）の授業内で実施した。

表 1.授業計画と内容

回数	内 容
1	ユニバーサルデザインとは
2	高齢者とファッション
3	身体障害者とファッション
4	乳幼児の生活とファッション
5・6	環境にやさしいファッション
7	新しくてきれいなファッション
8	ユニバーサルデザイン事例研究
9	デザインワーク
10	制作アイテムの検討
11～ 14	制作
15	▼ まとめ、発表

結果

1. デザインワーク

ユニバーサルデザインの事例研究として、東日本大震災被災者支援のために何ができるかを考えるために、まず初めに地震発生当時から数カ月間のドキュメント映像を見て、現地の様子を振り返った。また、インターネット情報より、被災地の情報を収集し、何が求められているかを検討した。その中で、学生たちは震災により両親を亡くしながらも前向きに生きる子供たちの様子に心を打たれ、着目した学生が多くみられた。

次に前半の授業で学んだユニバーサルデザインの知識を活かして、制作アイテム、使用対象者、デザイン、制作概要を各自で考え、企画内容をまとめて発表した。発表したデザインの一を図 1 に示した。

図 1 に示した内容は、防寒具としてのポンチョと膝かけ、赤ちゃんのおくるみの 3 通りに使用できるデザインを提案したものである。学生たちは、前半で学んだユニバーサルデザインの概念を実際の製品に活かし、創意工夫した様々なアイデアを提案した。

2. 制作アイテムの検討

各自の企画内容をアイテム毎に分類し、制作方法や制作難易度を考慮した結果、一番意見が



図 1.企画内容結果一例

多かった防寒アイテムグッズの制作に決定した。

次にグループで制作を進めていくために、4 チームに分かれて、グループ活動の中で、デザインや使用材料を選定した。デザインについては、外観だけでなく、機能性についても着目し、温感効果、大きさ、使用感について、試作品を用いて簡易実験を行った。

カイロ使用の実験結果は図 2 の通りである。

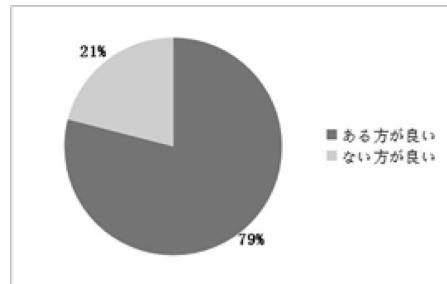


図 2.簡易カイロによる効果

図 2 の結果より、試作品に簡易カイロを装着した状態と装着なしの場合を比較したところ、79%の学生はカイロがある方が快適であると回答しており、布地の場合より首元を暖める効果を実感することができた。実際に簡易カイロを使用してモニタリング調査で確認することにより、防寒具の機能効果を上げるデザイン面の工夫を検討することができた。

その他にも、使用者の体型や生活状況を考慮して、大きさや形を検討したり、使いやすさを検討するなど、アイデアを出し合って、デザインに反映させていた。



写真 1.試作品による簡易実験



写真 2.デザイン検討の様子



写真 3.素材選定の様子

3. 制作

制作にあたっては、制作計画を立て、グループ内で協力し、作業を分担しながら進めた。毎時間、制作記録をまとめながら、内容を振り返り、次回の取り組みに繋げていった。制作に費やした時間は授業内で4コマ、授業以外で11時間程度であった。制作記録をまとめることで、作業の振り返りの反省ができ、次の作業の目標が設定できた。実際に学生が記入した制作記録の一例を図3に示した。

学生たちはグループ制作を通して、お互いに協力し合い、分業で制作することにより作業の

被災者支援のためのUD制作記録(2)	
アイテム名	制作日
スリッパカバー	12月13日(火)
制作計画 ○ 裁断 (220 前) ○ 縫製 (輪作り) ○ // (ヒモを通す輪を作る) ← 途中	
制作記録 ① 220 前より、前にした。 表 → 裏 → 表 → 裏 → 表 → 裏 ② 柄を合わせて 10cm ぐらい残して 縫う。 ③ 表に 2 回り 縫う。	
感想、反省 今回の縫製 進み遅いので、よめた。あとは、ヒモを通す輪を作って、ヒモを通すのは、作成なので、細かい作業でも集中して行いたいと思う。 次回のヒモの 通し口の 作業は、細かいですが、ていねいに進めたい。	

図 3.支援アイテム制作記録

効率化をはかった。

制作の様子、およびできあがった防寒アイテムの一部は以下の通りである。



写真 4.制作の様子



写真 5.完成アイテムと制作者①

4 グループともにそれぞれのデザイン特性が表れ、制作した防寒アイテムにはユニバーサルデザインの発想が上手に活かされていた。

子供用のマフラーを制作したグループはぬいぐるみなどに使用される毛足のあるボア生地を



写真 6.完成アイテムと制作者②

使い、アニマルフェイスをイメージしたかわいらしいデザインを施し、裏側にはカイロ入れも付け、寒い時には使い捨てカイロを入れて保温効果を高めるように工夫した。また、女の子用マフラーを制作したグループは、表地はカラフルな布地を組合せ、布地の間にレースをつけてフェミニンなデザインにし、裏地にボア生地を使用することにより、デザイン性だけでなく防寒具としての機能性を加えた。

初めて制作に挑んだ学生が多かったが、グループで作業を進めることで、お互いの欠点をカバーし、影響を受け合いながら制作することで、個人のレベルを超えた作品作りが展開できたようであった。学生たちは制作した防寒具を手に取り、完成した喜びと困っている人に支援する喜びで大変満足そうであった。

4. 支援状況

制作した防寒アイテムは、一つひとつ丁寧に梱包し、手紙を添えて被災した本学在学生の地元（宮城県気仙沼市）へ寄贈した。被災地では小学生を中心とした地域住民に配布された。今回の取り組みは地元メディア（愛知県、宮城県）の新聞にも紹介された。

その後、防寒アイテムを受け取った方々から手紙と色紙が届き、とても喜んで使用していただいていることがわかった。防寒具を受け取った子供たちは、手作りのぬくもりを感じ、既製品にはない温かな気配りを感じて使用していることが確認できた。支援先の状況を知った学生たちは自分たちのユニバーサルデザインの実践が多くのひとに喜びを与え、また被災者支援に繋がった満足感を味わった。



図 4.中日新聞掲載記事 2)



図 5.三陸新聞掲載記事 3)



写真 7.支援先からのお礼の色紙

5. 制作を通して得られた教育効果
グループ制作終了後、アンケート調査、およ

び学習内容のまとめを行い、今回の取り組みによる教育効果を分析した。まず、はじめに制作活動について、アンケートによる結果をグラフに示した。

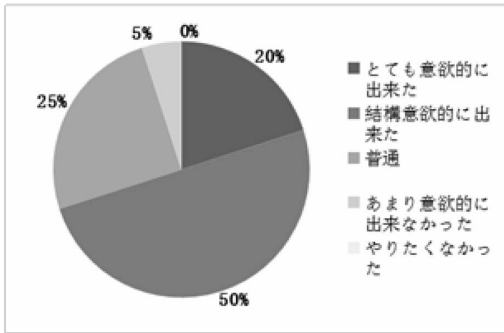


図 6.取り組みについての自己評価

図 6 の結果より、ユニバーサルデザインを活かした被災者支援は、70%の学生が意欲的に取り組むことができ、学生たちの積極的な姿勢がうかがえた。しかし、30%の学生は消極的であり、自ら進んで活動に結びつけることができなかった。

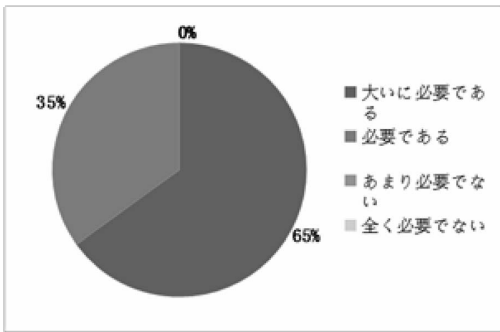


図 7.ユニバーサルデザインの必要性

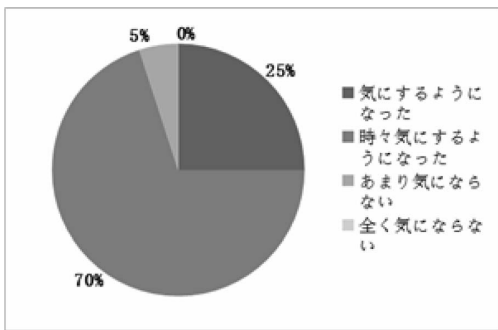


図 8.ユニバーサルデザイン製品への着目度

また、図 7 の結果より、今回の取り組みを通

して、ユニバーサルデザインの必要性をほとんどの学生が感じることができた。自分たちで実際に企画、制作を行うことで、様々な問題に直面し、試行錯誤を繰り返す中で、ユニバーサルデザインの理解に繋がったと思われる。そのため、図 8 に示した通り、95%の学生が実用化されているユニールデザインの製品を気に入るようになったと回答している。今までは、特に気に入めないで使用していた様々な製品であったが、利便性や機能性などのユニバーサルデザインとして必要な仕様を考える能力が身についたと推測された。

制作にあたっては、次の結果が得られた。

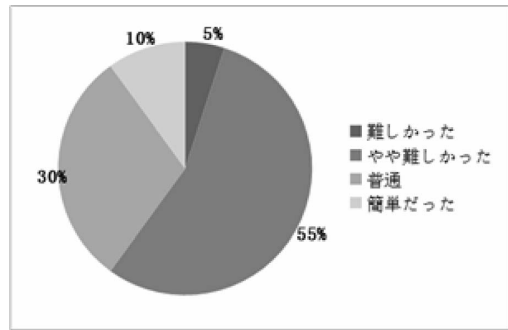


図 9.制作の難易度

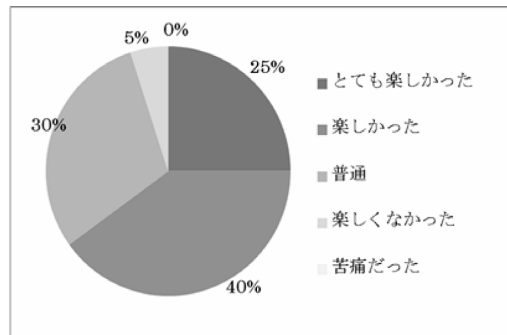


図 10.制作状況

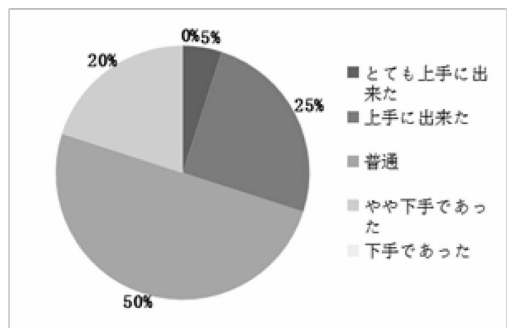


図 11.制作アイテムについての自己評価

図9に示した通り、制作アイテムの難易度については、約60%の学生がやや難しかったと回答しており、初めての制作でそれぞれ苦戦したことが伺えた。しかし、図10の結果から、実際の制作状況は65%の学生が楽しいと回答しており、制作自体は難しいと感じながらも、多くの学生たちは楽しく活動できたことがわかった。

今回はグループでの活動であったので、お互いに協力し合い、相談しながら進めることで、難しいと感じた作業もスムーズに楽しく進めることができたようである。

でき上がった防寒具の自己評価について、図11に示した。やや下手であったと回答している学生は20%であり、残りの学生は予想以上の出来栄であったことが得られた。30%の学生は上手にできたと自己満足しており、中にはかわいらしくできたから自分で使用するものを作りたいと意欲的な声もあがっていた。

今回の活動はグループで進めてきたため、グループワークの中で学生たちひとり一人がどのような意識で取り組んできたかを知るために、経済産業省が提唱している社会人基礎力⁴⁾の一部の能力について検証した。学生たちが自分の活動を振り返り、それぞれの項目に対して、1～5段階評価を行い、目安として平均値を算出した。その結果は図12の通りである。

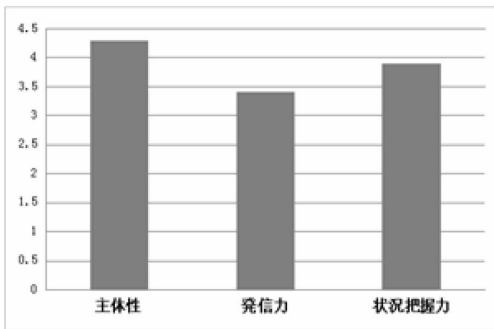


図12.活動における能力自己評価

本プロジェクトに対する取り組む姿勢については、「主体性」の項目で評価した。全体的には平均値4.3という高い評価結果が表れた。次に、グループ内での自分の立場を把握し、自らの意見を伝える能力については「発信力」、

「状況把握力」の項目で評価した。「主体性」ほど自己評価は高くはなかったが、チーム内で自分自身の立場を理解し、その中で積極的に取り組んだと自己評価した学生が半数以上見られたことがわかった。評価にあたっては、自己判断で行ったため、個人の意識の差が大きいことが想定される。そのため、各項目ともに平均値のみの判断では、有効性が評価できないが、おおよその方向性を示す尺度として算出した。

次に授業終了後、学生たちによる授業内容から得られた感想の一部を以下に抜粋した。

- ・この制作を通して、みんなで話し合い、協力して一つのものを作り上げることで、少しずつまとまりができ、効率よく作業ができた。コミュニケーションを図り、自分や相手の意見や考えをお互い知り合うことの大切さがわかった。
- ・防寒具を被災地のために送ると考えれば、わざわざ手作りしなくても既製品の方が手間がかからず数もたくさん送ることができますが、手作りすることは私たちの「少しでも力になりたい」という気持ちや「愛情」が伝わり、支援先の方も大切に使おうと思ってもらえる気がしました。
- ・直接被災地に行って、ボランティア活動することは難しいですが、このように間接的であることは今後も続けていきたいと思った。
- ・困っている人たちのために、マフラーを作って、マフラーを使ってくれている所を想像したら、楽しく作ることができた。
- ・震災について考えることが減ってきた頃にユニバーサルデザインの授業で再度考えることができ、私たちの作った物が被災地の人の手に渡り、役だってくれたらこんなに嬉しいことはないと思いました。
- ・作品制作を通して、ユニバーサルデザインの良いところがわかりました。東日本大震災の被災地を支援できて良かったです。
- ・制作していくうちに自分ができることは何かを考えたり、率先して動くことができたので良かったです。
- ・震災があっても辛くても、寒過ぎる状況の中でも子供たちには元気に外で遊んでほしくて、子供用のネックウォーマーを提案しました。それ

を使って遊んでくれていたらとても嬉しいです。
・上手いとか下手とかではなくて、手作り品で被災地を支援することはすごく温かいことであるし、作っていて頑張ろうという気持ちになりました。

（学生レポートより抜粋）

以上の内容から、学生たちは、それぞれに被災者のために少しでも役立ちたいという思いを持って制作を進めてきたことが伝わってきた。一人では難しい支援活動ではあるが、仲間と協力することにより、大きな力となり、ユニバーサルデザインの提唱する「ひとにやさしいファッションのあり方」を今回の被災地へ届ける防寒具の制作を通して実践できたことが得られた。

まとめ

今回の実践研究を通して、学生たちは様々な視点からユニバーサルファッションについて考え、ひとにやさしいもの作りのあり方を捉えることができ、教育成果として以下の事が得られた。

- 1) デザインワークでは、使用者の立場を検討し、デザイン性だけでなく機能性の大切さを理解し、ユニバーサルデザインの視点から服飾品の果たす役割を見出すことができた。
- 2) 制作では、グループワークを中心に進めたので、チームで働く力がつき、コミュニケーション能力を養うと同時にチームワークの大切さを体得した。
- 3) ユニバーサルデザインの実践が被災者支援に繋がり、その過程を通して多くの事を学び、感動を味わうことができた。

今回の取り組みは、チームを通して行った学習実践により、個々の主体性や責任感が身に付き、それぞれに発信力や状況把握力などの社会人基礎力の能力が育成できた。また、被災地支援を目的とした事により、本学の建学の精神である「真心」「努力」「奉仕」「感謝」の四大精神の実践にも繋がり、有効的な学習効果を上げることができた。

本研究の一部は、2012年日本繊維製品消費科

学会年次大会にて研究発表を行った。

引用文献

- 1) 長谷川えり子：「ユニバーサルファッション教育の実践（1）」、愛知学泉大学・短期大学研究論集（2005）
- 2) 中日新聞朝刊：（2012.2.11.）
- 3) 三陸新聞朝刊：（2012.2.23.）
- 4) 経済産業省：「社会人基礎力」

参考文献

- ユニバーサルファッション協会編：「ユニバーサルファッション宣言」中央公論新社（2002）
田中直人他：「ユニバーサルファッション」中央法規出版（2002）